

AIを活用した ビジネス・監査の展望と課題

人工知能（AI）を、いかにビジネスに取り入れるか——。多くの業界で現在、模索されているテーマだ。会計監査の世界もこの例に漏れない。先般、開催されたグローバル会計・監査フォーラム（主催：日本経済新聞社、協賛：日本公認会計士協会）では「AIを活用したビジネス・監査の展望と課題」と題し、会計監査とAIの専門家が議論を展開。課題の抽出とともに、これからの会計監査や監査人の在り方、進むべき道を展望した。

企業ビジネスにおけるAIの活用状況と今後の展望

第1部

内部監査のデジタル化に5つの視点から取り組んでいる。①監査対象プロセスのデジタル化②監査作業のデジタル化③アナリティクスを活用したリスク分析や継続的モニタリング④戦略的な監査計画⑤デジタル化を踏まえた監査手法、である。



五十木 氏

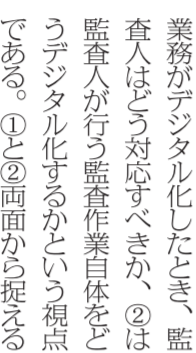
AIの定義は専門家の間でも明確ではない。あらゆる課題に「汎用人工知能」の活用を指すこともあれば、電子化や簡単な事務処理の自動化など、既存のIT技術の延長をAIと呼ぶ例もある。



浦本 氏

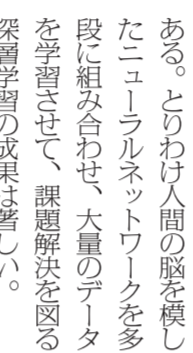
AIは製造業だけでなく、金融業や小売業など、様々な業界で活用される。会計監査の分野も、無例外ではない。

①は監査対象となる営業や製造などのフロント部門、財務や法務などのミドルバック部門の



五十木 氏

AIは製造業だけでなく、金融業や小売業など、様々な業界で活用される。会計監査の分野も、無例外ではない。



浦本 氏

AIは製造業だけでなく、金融業や小売業など、様々な業界で活用される。会計監査の分野も、無例外ではない。

パネリストスキャクション

2013年、英オックスフォード大学のマイケル・オズボーン准教授の論文が大きな話題を呼んだ。准教授は多くの職種が今後、AIやロボットに取って



人間とAIとの連携でより高度な監査を実現

日本公認会計士協会会長 関根 愛子 氏

代わられると主張。会計士および監査人は、その代表例とされた。しかし私はそう思わない。確かにAIに任せざるべき業務はある。AIを活用し、人間ならではの高度な判断やコミュニケーションに注力しながらAIと人間の役割を明確化し、その連携で、より高度な監査を実現することが、我々の使命だと思つて

JICPAにおける先進技術研究と研究報告 『次世代の監査への展望と課題』について

重要事項3点を明確化

当委員会では、会計士向けのIT（情報技術）研修の実施や、IT関連の海外論文の翻訳など、ITに関わる会員への業務支援および啓蒙活動を行っている。最近では「未来の監査専門委員会」を設立。著名なAI研究者を含めた有識者との意見交換を行いながら、研究報告をまとめた。同報告では次の3点を重要



日本公認会計士協会 AI委員会未来の監査専門委員会委員長 紫垣 昌利 氏

事項としてあげた。第1は、AI、RPA（ロボティック・プロセス・オートメーション）やブロックチェーンといった先端技術が被監査会社のビジネスを変革し、それが監査にも影響を与えるという点。第2が、それらの先端技術が、監査技法自体にも影響を与えるという点。そして第3は、これらの革新を背景にした「次世代の監査」実施に当たっては、会計データの標準化や被監査会社の協力が重要な課題がある点だ。

第2部

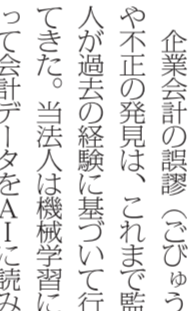
監査知識を集約 Q&Aシステムに



小川 氏

自然言語処理と機械学習技術を使い、会計、監査、不正事例に関するQ&Aシステムの開発を進めている。同システムに会計監査の知識を集約。言葉での質問に言葉で返す仕組みを目指す。開発の背景として、日本の会計基準の複雑化、さらに国際会計基準や米国会計基準を必要とする案件の増加がある。

異常な仕訳を抽出 不正会計を予見



小川 氏

企業会計の誤謬（ごびょう）や不正の発見は、これまで監査人が過去の経験に基づいて行ってきた。当法人は機械学習によって会計データをAIに読み込ませ、異常な仕訳を自動的に抽出。そこから不正会計を見つけ出す「AI会計仕訳検証システム」を試験運用している。

監査法人におけるAIを活用した取り組み

AIが問題点指摘 監査品質向上を図る



加藤 氏

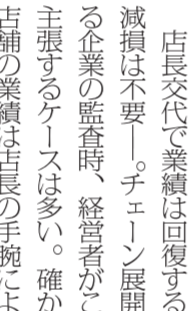
監査品質の向上を図るため、財務諸表を訂正した企業に着目。該当企業の有価証券報告書をAIに学習させ、その特徴をつかみ、被監査企業に同様の事象が生じる可能性を探る。

企業業績を予測 協議での材料に



外賀 氏

店長交代で業績は回復する。減損は不要。チェーン展開する企業の監査時、経営者がどう主張するケースは多い。確かに店舗の業績は店長の手腕によるところが大きい。経営者が言うほど回復するのだろうか……。



加藤 氏

AIを活用したビジネス・監査に関する課題と、将来的に求められるスキル

第3部

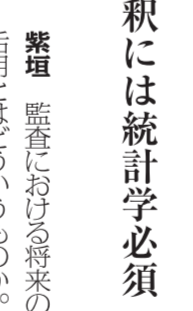
手塚 第1部では浦本氏にAI研究の最新動向を、五十木氏に監査分野でのAI活用に関する課題を聞いた。



手塚 氏

また、第2部では監査法人でのAI活用に関する課題を聞いた。これらについて、第3部では会計監査でのAI活用の今後を展望したい。

AI同士の対話で監査進行 分析・解釈には統計学必須



手塚 氏

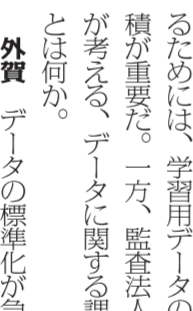
紫垣 監査における将来のAI活用とはどのようなものか。五十木 アレクサのようなAIエージェントが、監査対象部門のAIエージェントと対話し、監査の計画や実行、報告業務を行う時代が来る。監査人は重大事項に注力することで付加価値の高い監査を実施できる。

AI学習用データ蓄積が重要



加藤 氏

データ標準化でAI活用加速



加藤 氏

AI活用でデジタル化は、企業のグローバルマネジメント向上にも寄与する。日本企業はこれまで海外子会社の管理に苦戦してきた。原因は文化や言語の違いとされる。これが、現地状況を適時に把握できないことが主因だと思つて

AI活用でデジタル化は、監査対象のデジタル化と「監査作業



加藤 氏

AI活用でデジタル化は、監査対象のデジタル化と「監査作業



加藤 氏